図書館サポートフォーラムシリーズ

日本図書館史概説 新版

岩猿敏生 著

日外アソシエーツ

序

図書館史研究はわが国の館界では、余り関心を持たれていない領域である。そのため、司書養成のカリキュラムにおいても、図書館史に関する科目は、必修とされていないだけでなく、科目改正が論じられる時、司書養成科目からの除外が論じられることさえあった。しかし、図書館学を社会科学の一つとして考えようとする時、図書館の歴史的研究は、社会科学としての図書館学にとっては、必須の欠くべからざる教育、研究分野にならなければならない。

それは、図書館とは何かを追求しようとする時、図書館とは何であったかがまず問われなければならない。したがって、その発展の歴史を科学的に探求することは、社会科学としての図書館学にとっては、もっとも本質的な、欠くべからざる研究分野でなければならない。歴史的研究を欠いては、その本質論を具体的に論じえないからである。

社会科学としての図書館学にとって、歴史的研究は必要欠くべからざる分野であるにもかかわらず、わが国の館界に往々見られる図書館史不要論は、何に起因するのであろうか。筆者はその最大の原因を、わが国における図書館史研究の未発達によると考えている。勿論われわれは、第二次大戦前からこの分野を開拓された小野則秋、竹林熊彦両氏のような、優れた図書館史家を持っており、戦後においても、幾人かの優れた研究者を持っている。しかし、戦後の図書館史研究は、戦後の日本の図書館がそこから歩み始めねばならなかった戦前の、明治以降の公共図書館史研究が、必然的

に中心にならざるをえなかった。それは大きな成果を挙げてきたが、一面ではまた、江戸時代までの所謂文庫時代は、今日の図書館学研究とは無縁なものとして、歴史的考察の視野から抜け落ちてしまった。

しかし、かつてなんらかの社会的役割を持って存在した鎌倉時代や、室町時代の文庫の書物が、その文庫印を明確に留めて、今日に伝えられている。数百年の歳月を越えて、それらの書物はかつての文庫の生き証人として、現在に生きているのである。文庫との明確なかかわりは明らかでないにしても、奈良、平安の古代の書物すら、現在に伝えられて厳然と生きている。

それらの古典籍は、従来は書誌学や古文書学等の研究対象として、重要視されてきたが、それらの古典籍から成り立っていたかつての個々の文庫については、その多くは、学問的な研究対象としてとり上げられることなく、今日に至っている。個々の古典籍でなく、それらの集積としての文庫は、それぞれの時代の中で、なんらかの役割を果していた筈である。それぞれの時代の書籍の集積の社会的意味、それをどのように、学問的研究の対象として構成しうるか、それにはいろいろなアプローチの方法があるであろう。

本書では、図書館文化は図書文化の上に成立しうるものであるから、図書文化の歴史的変遷を基盤として、図書館の歴史的展開を探ろうと試みた。人類の文化史の中で、図書文化はあらゆる民族が持ちえたものではなく、また、図書文化を持ちえた民族でも、その民族のすべての階層の人が、同じように享受しえたものではなかった。それは、まず特定の社会階層によって担当されたが、図書文化を担当した階層は、時代とともに移り変った。その変遷に基づいて、図書館史の時代区分を

考えてみた。

通常図書館史関係の研究論文は、個別的な図書館事象の歴史的研究が多い。このような歴史研究は、図書館史研究の基礎となるものであり、極めて重要であることは言うまでもない。しかし、個別的な事象の歴史的研究は、それが歴史研究として意味を持ちうるためには、個別的な事象の底に流れている時代的背景を、常に考慮していかなければならない。

このような、個別的な事象研究の背景となりうる時代の流れを、大きく理解しようとするのが通史である。通史は個別的研究に基づかなければならないが、個別的研究をただ寄せ集めれば、それで通史が成立しうるというものではない。個別的研究で明らかにされた個々の事象の底に流れている一つの時代の歴史的意味を理解するには、なんらかの理論的枠組が必要である。一般的に文化史を考える場合、それを歴史の流れの上部構造として、社会の生産力の発展や、生産関係の展開を基盤とする下部構造の変化、発展から、上部構造としての文化の発展、変化を構想し、理論化が試みられることが多い。

しかし、今の筆者には、上部構造の一部としての図書館史研究を、下部構造の変化、発展にまで掘り下げて、理論的枠組を構想しうるまでには至っていない。それで、本書では下部構造への眼差しは持ちながらも、まずそれぞれの時代の図書文化を、どの社会階層が担当したかによって、図書館史の時代区分を考えて、日本図書館史の通史を構想してみた。したがって、本書は日本図書館史に対する筆者なりの一つの素描に過ぎない。それは、一つの理論的枠組を構想するまでにまだ至っていないが、少くとも一つの観点から、日本図書館史の全体を理解しようとする試みである。

残念ながら、一定の観点からの日本図書館史の通史は、今日まで極めて少ない。日本図書館史の教科書は何冊か書かれているが、いずれも一般史の時代区分に従って、複数の執筆者による年表的記述に終始していることが多い。そのため、図書館史を文化史の一部門として、どのように考えるべきかという、理論的枠組に対する考察が疎かになりがちである。その結果、図書館史は多くの学生にとって、史実についてのたんなる暗記科目となり、図書館現場においても、無用な科目と見なされてしまいがちである。

筆者は、今日のわが国の図書館史研究にもっとも欠けているのは、通史の不足であると痛感している。通史と言っても、日本図書館史の通史だけでなく、それぞれの時代ごとの通史研究が必要である。それは、個別史研究は通史によって方向を与えられ、また、優れた個別史研究は通史の再検討、再構成を促すからである。通史研究と個別史研究があいまって、歴史研究は進むのである。筆者がまだ素描に過ぎない本書をあえて公刊するのも、通史研究発展のためのささやかな一歩となりうればと思うからにほかならない。

目次

序……3

1 序論

1・1 日本図書館史の時代区分……24
1・2 わが国における図書文化の成立……26
1・2・1 わが国への文字伝来……26
図書の材料　図書と文字文化　わが国における文字文化の始まり
1・2・2 わが国への図書の伝来……28
〔注〕……29

2 貴族文庫時代（飛鳥、奈良、平安時代）

2・1 飛鳥時代……32
大和政権の成立　聖徳太子　大化の改新　天武天皇と律令体制の確立
2・2 奈良時代……34

2・2・1　木簡と紙……34
巻子本　製紙法の伝来　木簡と竹簡
2・2・2　写経の盛行と百万塔陀羅尼の印刷……36
写経の盛行　一切経の書写　壁蔵と輪蔵　奈良時代の写経　百万塔陀羅尼印刷に至る時代背景　銅版説と木版説　印刷術と紙
2・2・3　奈良朝における文庫……40
（1）宮廷の文庫……40
大宝律令の完成　図書寮の設置　文殿
（2）大学と国学……41
官僚制と人材養成機関　大学と国学
（3）貴族文庫……42
貴族の個人文庫　石上宅嗣の芸亭　芸亭の意味
2・3　平安時代……44
2・3・1　巻子本から折本、粘葉装、綴葉装へ……44
巻子本と折本　粘葉装　仮名文字の成立　綴葉装と国書　枡型本
2・3・2　写経と摺経……48
平安遷都と政教分離　最澄と空海　写経と摺経　装飾経　大量写経と摺経　仏典の実用的印刷の始まり　春日版の刊行

2・3・3　漢詩文の盛行と『日本国見在書目録』……51
平安朝における漢籍の将来　漢詩文の盛行　仏典の将来と将来目録『日本国見在書目録』
2・3・4　大学の衰退……53
大学の衰退　有力氏族の大学別曹　官職・学問の世襲化
2・3・5　平安朝貴族の文庫……55
平安朝貴族の漢籍収集と宋版　好書家藤原頼長　頼長の文庫　藤原通憲とその蔵書目録　日野資業の法界寺文庫　大江匡房の千草文庫
〔注〕……59

3　僧侶文庫時代（Ⅰ）（鎌倉時代）

3・1　鎌倉時代と新仏教……62
武家政権の成立　貴族階級の文化担当能力の衰退　鎌倉新仏教の興隆　禅宗の伝来と武士階級との結びつき
3・2　鎌倉時代の印刷文化……65
印刷文化の発展と仏典の開板　高野版　高野版と安達泰盛　高野版の盛衰　浄土教版　日蓮宗と浄土真宗　禅宗と五山版

1

序論

1・1　日本図書館史の時代区分

イタリアの歴史学者ベネデット・クローチェは、その著書『歴史叙述の理論と歴史』の中で、歴史を考えることは歴史を時代区分することだと述べている。時代区分の意識なくしては、歴史を考えることはできない。

本書では、図書館史を歴史の流れの上部構造である文化史の一部として、図書館史をまず図書文化の歴史と関連づけて考え、図書文化が時代によって、どのような社会階層によって担当されたかによって、図書文化史及び図書館史の時代区分を考えていくことにした。いま、このような観点から、本書では日本図書館史の時代区分を、次のように考えた。

【図書館史の時代区分】

貴族文庫時代
僧侶文庫時代
武家文庫時代
市民図書館時代

【一般史の時代区分】

飛鳥、奈良、平安時代（古代）
鎌倉、南北朝、室町時代（中世）
江戸時代（近世）
明治以降（近代、現代）

わが国の古代社会でまず図書文化を担当したのは、朝廷を中心とする貴族階級であり、したがって、文庫も彼らによって営まれた。中世では、政治権力は武士階級に移ったが、彼らは図書文化を

担う程の文化的能力を十分に備えるまでに至らなかった。一方、貴族階級は政治権力とともに、すでに新しい図書文化を創造しうる力を失いつつあった。この間にあって、わが国の図書文化を担ったのは、僧侶階級であり、文庫も彼らによって営まれることが多かった。それで、中世を僧侶文庫時代としたが、それは仏典を中心とする専門的な集書であり、寺院に設けられた。

武士階級が政治権力だけでなく、図書文化の担当能力を十分に備えるようになるのは、江戸期に入ってからである。それで、江戸期を武家文庫の時代とした。もちろん、武士階級は江戸期に入って、一気にそのような能力を身につけたのではなく、すでに室町期後半から、図書文化を担いうる能力を徐々に蓄えつつあった。

本書では、貴族文化時代を平安時代まで、僧侶文庫時代を鎌倉から室町時代まで、武家文庫時代を江戸時代としたが、武家文庫時代を鎌倉から江戸時代までとする説もある。[1] このように、それぞれの時代を、いつからいつまでとするかについては、異説もあるが、貴族、僧侶、武家文庫時代という各時代の呼び方については、おおよそ同じである。ただ、明治以降の時代の名称については、一致した見解がない。たとえば、武井権内は公共図書館時代と称している。[2]

英米における公共図書館（public library）は、市民社会の成立を基盤とする図書館類型である。公共図書館の成立は、図書館文化史上極めて重要な意義を持つが、パブリック・ライブラリーの概念には、英米の社会の歴史的伝統が絡んでおり、明治以降のわが国の一般市民に公開された図書館が、英米における公共図書館概念と同じ概念のものであるかということになると、疑問が残る。それで、確立された概念ではないが、市民社会における市民階級によって担われるべき図書館という

3

僧侶文庫時代（Ⅰ）

（鎌倉時代）

3・1　鎌倉時代と新仏教

武家政権の成立　平安朝末期の保元、平治の乱、さらに源平の争乱は、政治権力の争奪に際して、武力が決定力を持つことを示した。しかし、平清盛を頂点とする平氏政権は、武家政権であったにもかかわらず、それはまだ貴族政権の枠内に留まるものであったのに対して、平氏政権を武力で打倒して源頼朝が鎌倉に開いた幕府政治は、初めて貴族政権の枠内から独立し、武士階級によって支えられた新しい武家政権であった。

平氏は京都に政権の基盤を置いたのに対して、頼朝は貴族政権の長い間の所在地であった京都から遠く隔たった鎌倉に幕府を開いた。しかし、頼朝の鎌倉幕府が実質的に支配したのは関東を中心とする東国政権であり、近畿以西になお根強い勢力を保持していた貴族政権を越えうるものではなかった。鎌倉政権が京都の政権を圧倒するのは、承久三（一二二一）年の承久の乱後であった。

しかし、文化の面では、鎌倉の武家政権はまだ立ち遅れていた。鎌倉幕府の第三代将軍実朝は、京の貴族文化に憧れ、和歌に親しみ、狩に出るより歌合を好んだ。鎌倉幕府は政治の実務面においても、京都の宮廷貴族の実務に長じた人材を招き、彼らの事務処理能力に頼らざるをえなかった。

貴族階級の文化担当能力の衰退　進展する歴史の流れから取り残された京都の貴族階級は、新しい文化を創造していく力も失っていき、これまで貴族階級が産み出してきた伝統文化を保持するだけになっていく。後に倒幕の軍を起した後鳥羽院によって、一二〇一年藤原俊成等に勅撰和歌集

選進の院宣が下され、一二〇五年（元久二年）『新古今和歌集』が選進された。それは奈良、平安の貴族階級が生み出した三大古典『万葉集』『源氏物語』『古今和歌集』の文学的伝統を承けつぐ最後のものであった。

しかし、貴族階級に替った武士階級は、まだ独自の文化を産み出す力を備えるまでに至らなかった。その間にあって、前時代以来の文化的伝統、とくに図書文化の伝統を支え続けてきたのは僧侶階級であった。

鎌倉新仏教の興隆　奈良時代の仏教は鎮護国家の宗教として専ら政治権力に奉仕し、平安時代には貴族階級の個人的な招福さらに極楽往生に奉仕した。壮麗な寺院も奈良時代には国家によって、平安時代には貴族によって建立された。仏教は民衆の信仰に直接支えられているものではなかった。

政治権力の交替とともに、仏教界においても鎌倉期に入ると、貴族仏教とは異なる民衆の信仰に支えられた新仏教が興ってきた。新仏教運動は北嶺の天台宗から出た法然（一一三三－一二一二）に始まる。法然の専修念仏の教えは、貴族のような造寺造仏のための財力も、さらに学問・知識も持たない一般民衆に、極楽往生の道を開くものであった。浄土教の教えは、さらに一般民衆に深く結びついた親鸞（一一七三－一二六二）によって発展させられる。東国では、法華経の信仰こそ唯一の正しい信仰であることを説いた日蓮（一二二二－一二八二）によって日蓮宗が始められた。

禅宗の伝来と武士階級との結びつき　これらの新しい鎌倉仏教が一般民衆に直接結びつき、支えられたのに対して、新興勢力である武士階級に結びついたのが、新しくこの時代に中国から伝え

人名索引

【あ行】
青柳文蔵　181, 182
秋間玖磨　225
阿佐井野宗瑞　101
阿佐井野宗仲　101
足利尊氏　82, 93, 94, 96
足利持氏　93
足利基氏　96
足利義昭　104
足利義兼　92
足利義政　88, 92, 110
足利義満　82, 85, 88, 92, 97, 110
足利義持　89
安達泰盛　66, 67, 96
アダムス,ウィリアム（三浦按針）　125
跡部良弼　174
阿部春庵　175
阿部櫟斎　180
新井白石　137
荒木田尚賢　150
有馬晴信　105
池田冠山　145
池田光政　139, 140
石井敦　312
石田三成　121
伊地知重貞　99
石部了冊　101
石上宅嗣　43
板垣退助　200, 213
一条兼良　72, 73, 90, 98
市橋長昭　145, 146, 157
伊藤東涯　150
犬養毅　274
井原西鶴　118, 140, 159, 160
今井貫一　257
今井似閑　151
今井太郎右衛門（大黒屋）　205, 206, 207
今川義元　121
ヴァスコ・ダ・ガマ　104
ヴァリニァーノ,アレッサンドロ　106
上杉定正　98
上杉憲実　92, 93, 94, 95, 97
植松安　183
宇多天皇　52
内田銀蔵　226
梅木幸吉　145
梅辻平格　206
栄西　64
叡尊　313
易林　101
江藤新平　200
恵美押勝（藤原仲麻呂）　38
円爾弁円（聖一国師）　70, 89
王禎　109
応神天皇　28
大海人皇子（天武天皇）　34, 36
大内教弘　97, 98
大内兵衛　286
大内政弘　97, 98
大内盛見　97
大内義興　97, 98
大内義隆　97, 98
大内義弘　97
大江音人　58
大江広元　74
大江匡房　58
大塩平八郎　150, 156, 174, 175
太田道灌　98
大槻文彦　181, 182
大友宗麟　105
大野屋惣八　164
大原雪斎　121
大村純忠　105
緒方良彦　313
岡本清茂　151
小瀬甫庵（道喜）　114
織田信長　104, 121
小長谷恵吉　53
小野則秋　54, 58, 72, 76, 89, 138, 145, 151, 152, 153, 155, 173, 180, 183, 194, 312
小野泰博　312
小山田与清　134, 177, 178

【か行】
快元　93, 94
貝原益軒　150
荷田春満　148
加藤宗厚　280
金子英生　313
金沢顕時　66, 68, 75, 76
金沢貞顕　75, 76
金沢貞将　76
金沢実時　75, 76
賀茂真淵　148, 150
烏丸光広　139
狩谷棭斎　176, 177
川瀬一馬　65, 76, 77, 84, 101, 116, 146, 158, 176
河内屋利兵衛　120
桓武天皇　34, 48, 52
菊池重朝　99
菊池租　153, 154
岸田貞教　153
木戸孝允　205
吉備真備　40, 41
木宮泰彦　70, 88
木村兼葭堂　178, 179
曲亭馬琴　164
清原宣賢　101
欽明天皇　28
空海（弘法大師）　45, 48, 52
九鬼隆一　216, 218, 221, 229, 230

著者略歴

岩猿 敏生（いわさる・としお）

1919年福岡県生まれ。1943年京都帝国大学文学部卒業。1950年九州大学図書館司書官、1956年京都大学図書館事務長・事務部長を経て、1976年関西大学文学部教授（～1990年）。1995年日本図書館協会顧問（～2013年）。2016年逝去。
著書に「日本文庫めぐり―蔵書の命運―」（共著、出版ニュース社）、「大学図書館」（雄山閣）、「図書館概論」（共著、雄山閣）、「大学図書館の管理と運営」（共著、日本図書館協会）などのほか、論文多数。

<図書館サポートフォーラムシリーズ>

日本図書館史概説 新版

2023年7月25日　第1刷発行

著　　者／岩猿敏生
発 行 者／山下浩
発　　行／日外アソシエーツ株式会社
〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 鈴中ビル大森アネックス
電話 (03)3763-5241（代表） FAX(03)3764-0845
URL https://www.nichigai.co.jp/

組版処理／有限会社デジタル工房
印刷・製本／株式会社平河工業社

©IWASARU Toshio 2023
不許複製・禁無断転載
《中性紙北越淡クリームキンマリ使用》
<落丁・乱丁本はお取り替えいたします>
ISBN978-4-8169-2973-1　*Printed in Japan,2023*